

対話とは人それぞれ違いがあることを前提として、相互理解を目的に行うものでした。しかしながら、もし、「違いがある」こと自体を認めてもらえなかったらどうでしょう。つまり、対話のための共通基盤を持ってない相手と接するときにはどうしたらいいのでしょうか。2回に分けてこの問題を考えてみたいと思います。今回のキーワードは支配と暴力です。

関わらないという選択肢

対話は双方に違いがあることを前提にしています。つまり多様性に開かれています。しかし、相手が「違いは認めません。あなたを理解する気はありません」というメッセージを発してきたらどうでしょう。その人とは対話できそうにありません。ただ、相手がそのメッセージのみで留まるなら、その人とは関わらない(少なくとも対話的關係は持たない)という選択肢があります。

「多様性を認めないのも多様な考えの一つだ」というのは否定した考えを正当化に使っている点で詭弁に近いものですが、だからといって、そういう人の存在は消してもいいと考えるなら、たしかに多様性に悖るでしょう。そんなとき、関わらずに共存するという道があるわけです。住み分けるということです。



関わらない選択をしづらいとき その1

しかし、相手が「違いを認めない」というメッセージに留まらず、「私と同じ考えを持ちなさい」(支配)とか、「そうでなければ罰を与えます」(暴力)といった手段に訴えてきた場合はどうでしょう。こうなると、関わらないという選択をするのが怖くなります。報復が怖いだけでなく、支配と暴力は大抵の場合、「逃げても行き場はない」という暗黙の脅しとセットになっているからです。

こういうときに大切なのは、相手と向き合えない自分を責めたりしないことです。なぜなら、支配と暴力は人と人が対等に向き合う土台を壊すからです。対話もできず、関わらないという選択も困難な状況に追い込まれているのだと知ることが第一歩です。

それでも支配と暴力は比較的認識しやすいかもしれません。今回は、関わらない選択がしづらくなっていることがもっとわかりにくい状況を取り上げてみたいと思います。

